

# 話題卓越性と C/T の外的対併合

ドイツ語とシンガポール英語の主文を中心に

若芝 青

## 1. はじめに：ドイツ語の主文 V2

本稿は、話題・主題卓越性を持つとされるドイツ語と口語シンガポール英語 (Colloquial Singapore English: CSE) における主文の統語構造を、Chomsky (2013, 2015) のラベル理論の観点から再考する。

本稿の主な分析対象であるドイツ語の主文では、文頭に第一要素として話題要素が生起し、その後ろに第二要素として動詞が生起するという動詞第二位 (Verb Second: V2) 構造を取ることが知られている (1)。

- (1) a. Die Kinder haben diesen Film gesehen.      b. Dieses Buch hat Peter gelesen.  
the children have this film seen                      this book has Peter read  
'The children have seen the film.'                      'This book, Peter read'

従来、ドイツ語の主節文頭 (前域) には、範疇や意味に関わらずあらゆる句が生起できることから、V2 は純粋に形式的な移動により形成されるという分析がなされてきた (Mohr (2005), Fanselow and Lenetová (2011), Blümel (2017))。しかし、そのような分析では (2), (3) のようなデータが補足できない。

- (2) a. Ein Kind hat einen Hasen gefangen. (prefield-XP = neutral)  
a child has a.ACC rabbit caught  
'A child has caught a rabbit.' (Fanselow and Lenertová (2011:174))  
b. Das Kind hat einen Hasen gefangen. (prefield-XP = topic)  
the child has a.ACC rabbit caught  
'The child has caught a rabbit.'
- (3) a. \*Einen Minister hat die Presse schon lange kritisiert. (prefield-XP = neutral)  
a.ACC minister has the press already long criticized.  
b. Diesen Minister hat die Presse schon lange kritisiert. (prefield-XP = topic)  
thisACC minister has the press already long criticized  
'This minister has long been criticized by the press.'  
c. Einen MINISTER hat die Presse schon lange kritisiert. (prefield-XP = focus)  
a.ACC minister has the press already long criticized  
(aber nicht den Kanzler)  
(but not the chancellor)  
'The press has already criticized a minister for a long time, not the chancellor.' (Mohr (2009: 147))

(2) のように文頭が主語の場合、主語の冠詞によって話題解釈に加えて中立的解釈が得られるのに対して、(3) のように目的語が文頭を占める場合、話題や焦点といった談話的意味を持つ場合しか許されない (Mohr (2009))。したがって、ドイツ語の主節文頭には情報構造が関わると言える (Mohr (2009), Samo (2018))。

加えて、Den Besten (1983) 以来のドイツ語 V2 には CP が関わるとする標準的な分析を採用すると、主語が文頭に生起する場合の Spec, TP から Spec, CP への String-Vacuous な移動を想定する必要があるが、これは経済性の観点からは望ましくないことが指摘されている (Travis (1991), Zwart (1993))。

## 2. 提案

本稿は、Chomsky (2013, 2015) のラベル付け理論の下、Epstein, Kitahara and Seely (2016), Otsuka (2017) などが提案する主要部間の外的対併合 (External Pair-Merge) を用い、話題卓越言語の主文では、C と T が外的対併合されると主張する。ドイツ語の主文については、以下の仮定を取る。

- (4) a. C と T が外的対併合した結果、T が非可視的である C(-T) が得られる。  
b. C(-T) 主要部では、C が元々持っていた  $[u\varphi]$ ,  $[v\text{Top}]$  などの素性が可視的なまま保持される。  
c. C(-T) に話題素性  $[\text{Top}]$  がある場合、この素性が話題卓越性を保証する。  
d. 動詞の移動は PF で起こる。 (Zwart (2017), Bayer and Freitag (2020), Blümel (2024))

本稿では、Zwart (2017) 等に従い、動詞の移動については PF で起こると想定する。Transfer の後、C(-T) にある  $[\varphi]$ ,  $[\text{Tense}]$  はドイツ語では接辞として host を必要とするため、動詞が C(-T) まで PF 移動することで、動詞の形が決定されると考える。また、助動詞がある場合、Aux から C(-T) まで移動すると仮定する。

### 3. 分析

まず、主語が文頭位置に移動する場合、主語が話題として機能する場合と中立的解釈の場合とで、C(-T) と主語が [Top] を持つか否かに随意性があると仮定する。(5) に文頭を主語が占める場合の派生を示す。尚、以下 (5) と (6) は動詞が PF 移動する前の統語構造を示す。

- (5) 主語が文頭に生起する場合 : Die Kinder haben diesen Film gesehen. (= (1a))

[ $\alpha$  Die Kinder]<sub>[uTop][ $\varphi$ ]</sub> C<sub>[vTop][u $\varphi$ ]</sub>(-T) [<sub>AuxP</sub> [<sub>v\*P</sub> <Die Kinder> diesen Film gesehen] Aux-haben]]  
the children this film seen have  
'The children have seen this film.'

主語が話題素性 [uTop] を持つ場合、主語は C(-T) にある [vTop], [u $\varphi$ ] とそれぞれ一致し話題の解釈が得られ、 $\alpha$  のラベルは <Top, Top>, < $\varphi$ ,  $\varphi$ > となる。他方、主語が [uTop] を持たない場合には、主語は C(-T) と [ $\varphi$ ] についてのみ一致し、 $\alpha$  のラベルは < $\varphi$ ,  $\varphi$ > となる。また、統語派生上 T が不可視であるために、Spec, TP から Spec, CP への String-Vacuous な移動は必要なくなる。

次に、目的語が文頭位置を占める場合の派生を (6) に示す。

- (6) 目的語が文頭に生起する場合 : Dieses Buch hat Peter gelesen. (= (1b))

[ $\alpha$  Dieses Buch]<sub>[uTop]</sub> C<sub>[vTop][u $\varphi$ ]</sub>(-T) [<sub>AuxP</sub> [<sub>v\*P</sub> Peter]<sub>[ $\varphi$ ]</sub> <Dieses Buch> gelesen] Aux-have]  
this book Peter read have  
'This book, Peter read.'

( $\alpha$  = <Top, Top>)

目的語は vP フェイズレベルで [ $\varphi$ ] 素性の照合を行っていることから、話題素性がなければ  $\alpha$  のラベルが決定できず、派生が収束しない。したがって、目的語の場合は常に [uTop] を持つ必要があり、話題素性は派生が収束するために必要な要素であると言える。加えて、文頭の目的語における談話解釈の義務性も導かれる (3)。また、元位置にある主語に関しては、C(-T) の持つ [u $\varphi$ ] と長距離一致すると仮定する (Kinjo (2018))。

本分析においては、目的語が Spec, C(-T) へ移動する場合主語が元位置に留まることを許すと予測する。ドイツ語では主語が vP 内に留まることができると指摘されているが (Diesing (1990), Haider (2010))、ラベル理論の下ではいわゆる {XP, YP} 問題が生じてしまう (Chomsky (2013))。ここで、Kono and Inaba (2024) に従い、ドイツ語においてはフェイズ性が v\* に留まると仮定する。これにより、Transfer 領域が v\* の補部となることから、Transfer 後には外項と v\* が派生に残り、その集合のラベルは v\* となるため、上記の問題を回避できる。

### 4. 口語シンガポール英語 (CSE) への分析の拡張

本稿の分析は、話題卓越言語であるとされる CSE にも拡張可能である。Lee (2022, 2023) は、従来 PF で起こる随意的現象だとされていた一致形態素 -s の脱落を、統語上の現象であるとし一般化 (7) を提出している。

(7) CSE における一致形態を欠く節では、主語は「話題 (topic)」として解釈される。 (Lee (2022, 2023)) 統語上 [ $\varphi$ ] を欠くとすると、従来の分析では TP レベルのラベルをどう決めるのかという問題が生じる。しかし、本稿の提案の下、CSE の主文においても C(-T) 構造を形成していると分析すれば、C(-T) と話題主語との間で話題素性 [Top] の一致に基づいたラベル付けが可能となる。尚、CSE の主文においても話題素性は適切なラベル付けを行い、派生が収束するために必要な要素であると考えられる。

### 主要参考文献

- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projections," *Lingua* 130, 33-49.  
Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projections: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Di Domenico, Elisa, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.  
Epstein, Samuel, Hisatsugu Kitahara, and Daniel Seely (2016) "Phase Cancellation by External Pair-merge of Heads," *The Linguistic Review* 33, 87-102.  
Kono, Koichi and Jiro Inaba (2024) "Transitive Expletiv-Konstruktionen und Scrambling im Rahmen der Labelling-Theorie," *Linguisten-Seminar: Forum Japanisch-Germanistischer Sprachforschung* Vol. 6, 60-81.  
Lee, Si Kai (2022) "On Agreement-Drop in Singlish: Topics Never Agree," *Glossa: A Journal of General Linguistics* 7 (1), 1-27.  
Mohr, Sabine (2009) "V2 as a Single-Edge Phenomenon," *Selected Papers from the 2006 Syntaxfest*, 141-159, ed by Grohmann, K. and P. Panagiotidis, Cambridge Scholars Publishing, Cambridge.  
Otsuka, Tomonori (2017) "On Two Ways of External Pair-Merge," *MIT Working Papers in Linguistics* 85, 135-146.  
Samo, Giuseppe (2018) *A Criterial Approach to the Cartography of V2*, John Benjamins, Amsterdam.